

特集

3年生が選んだ本

読書感想文

まえがき

前号は4年生による1冊の本『限りなく透明に近いブルー』（村上龍）の読書感想文特集であったが、今度は、国語科の御協力をえて、3年生が正月休みに読んだ本の読書感想文特集を組んでみた。頁数の制約のため各科2篇に制限させてもらったが、掲載できなかったものにも、優れたものがあったことを記しておきたい。

視覚的人間、あるいはテレビ的人間が、街にあふれている今日、読書量を誇り、読解力を競いあうことは高等教育を受けている学生のむしろ“つとめ”ではなからうか。大衆文化にドブプリつかり“満足している豚”には、絶対にならないということを、自分自身に対する誓いの言葉にしてもらいたい。そのような矜持（きょうじ＝誇り）を持った学生が、もっともっと増えてくれることを願っている。（カットのイラストは久し振りに5土 菅野勇浩君に登場を願った。卒業を前にしているいろいろ忙しいようであるが、次号にも健筆をふるってもらおう予定である。乞御期待。）

芋川平一

宮崎音弥 著

「愛と憎しみ」

—その心理と病理—

3M 目 黒 一

著者は「愛と憎しみ」ということについて、心理学的にもっと研究がなされていはずであるのに、ほとんど取り上げられていないという点に疑問を抱き、それはもっと解明されるべきものであると述べている。またこの副題は「その心理と病理」となっており、そのことによって著者は、心理学的には実験と統計ばかりでなく、もっと病理法（病的な状態を土台にして、

普通の心理をあきらかにする方法）を採用すべきだともしている。

本書は具体的な例や図をかかげて、心理学者ばかりでなく、一般の人々にもわかりやすく書かれており、愛と憎しみという、人間にとって重要な問題に十分答えているといえる。

著者は京都大学出身で、社会心理学など心理学のいろいろな部門を専攻し、心理学関係の著書も数多く、本書は著者にとって最も得意な分野であると思われる。

本書の内容は十一章に分かれており、愛に関するところが六章、憎しみに関するものが二章で、あとの三つの章は「愛と憎しみ」について総合的に判断されている。

とりわけ、これら十一の章の中で重要だと思われる

のは、愛の問題を取り上げた第一章「愛とは何か」、憎しみの問題を取り上げた第七章「憎しみとは何か」、そして最も重要だと思われる第十一章「『愛と憎しみ』の社会心理学」である。この十一章は前の十章までの問題をさらに進め、個人というものから集団へと拡大している。

以下、これらの第一、七、十一章を紹介し、その後、他の章の紹介をしたいと思う。なぜなら、前にも述べたように、内容は大きく三つに分かれていて、重要な三つの章に統合されるからである。

第一章「愛とは何か」は愛情の本質について述べているが、その中で著者はまず、愛情のない状態を観察しようとしている。そのために精神分裂病の人間を使い、彼等の愛情の減退は、「他人と共に生きる欲求」をなくしてしまったことと関連しているものと推測している。そこで著者は、生物の世界にみられる「共生」(アリとアブラムシのようにいっしょに生活して、互いに利益を得る)ということばを借用し、親子がもちつ、もたれつ生活する場合や後天的につくられた社会的な共同生活の傾向も含めようとしている。そして精神分裂病では共生の欲求が失なわれていると結論づけている。その後、共生の概念で、「共生とは共生欲求を満足させる行動だ」と定義づけ、その欲求、条件を述べ、一致した行動をとることなどだとしている。

そして著者は、共生の形のちがいで「奪う愛」と「捧げる愛」とをあげ、両者は全く異なったものではなく、どちらも欠けることがあってはならないとしている。主としてこの章で著者が述べているのは「共生の欲求」であって、人間の愛情は、母と子のあいだの守り、守られる関係から発生すると結論づけ、そこに共生があると述べている。いいかえれば共生が愛情であると結論づけている。

第七章「憎しみとは何か」は結論として憎しみとはマイナスの共生であるとしている。共生がもちつ、もたれつの生活であるのに対し、マイナスの共生は離れた生活を望むということである。

愛情を失なう状態でなく、「憎しみ」の出現として前の精神分裂病の例をあげると、周囲と同調しない点の一つに「人嫌いとなり、他人を疑うなど、共感感情が異常になる」をあげている。

さらに著者は、憎しみは抑圧されることによって人間の行動は社会化されるとし、また憎しみは転移されるものとしている。やはりこの場合も社会化される。

第十一章「愛と憎しみの社会心理学」は、大きく、愛国心、孝行、偏見と悪玉化、の三つを中心として、話が進められ、個人に対する愛と憎しみから集団に対しての愛と憎しみにうつる。

愛国心はつぎのものが含まれていて、時々で勝手に使われていることをあげている。

(一) 愛国感情——われわれが自然にいだく、国に対

する愛情

(二) 自己防衛的愛国心——国家にたより、これに保護を求める気持ち

(三) 愛国義務——国家に対する奉仕または忠誠の義務

四 国家的集団愛——自分の愛する社会集団の平和を保ち、これをよくしようとする努力であるが、その社会集団として国家をえらぶ場合

これら四つの場合について、それぞれくわしい具体例をあげ、愛国心の問題については価値や論理が混入するが、心理的な分析とその検討は不可欠であると結論づけている。次

次に孝行について、愛国心の四つのものと平行して、

(一) 孝行義務——男女の愛情の場合のサディズム、マゾヒズムに相当し、親は子に服従を要求することによって子を受する。

(二) 自己防衛的な親に対する態度——コドモは親によって不安を解消し、親によって成長していく。親にたよることは自分を守ることである。

(三) 親に対する愛情——親と生活を共にしたいという欲求である。

と述べ、(三)について 物理的に、すなわち同じ屋根の下で暮らすだけがほんとうの共生ではなくて、物理的な共生は心理的共生を妨害することさえあるとしている。

「偏見と悪玉化」ということについて。「偏見」は「好き嫌い」が極端になるとあらわれる。しかもそれは憎しみへの最初の段階で、悪玉化への第一歩だといえるのである。そして結局「悪玉化」は憎しみがさらに進んで攻撃的な形をとる場合と結論づけている。

著者は最後に精神的共生ということとをあげ、「共生したい欲求」こそ愛情に不可欠だと結論づけている。この著者の考えに対し、私の体験などと照らし合わせてみると非常に一致しているものをみることができる。確かに愛しているものとはいっしょにいたいし、憎しみをもっているものとは離れたいと願うからである。

著者はほかに愛情に関して具体的な例として、恋愛、親子愛などをあげ、それぞれに対し、くわしく説明している。

本書は「愛と憎しみ」という、普通の人間には漠然としか理解できないものを、心理学の立場から、むだをはぶき、正確な知識を与えてくれるもので、私はこの本を推奨する。また巻末の事項索引、人名索引、注および引用文献も非常に丁寧である。

田代三良 著

「高校生」

3M 山田 寿男

この「高校生」という書は、高校に、また高校生に係わる多数の問題の解明に資するために、現代の高校教育の実態を教師という立場から明らかにしようとしているものである。著者である田代三良氏も高校の教諭をしており、このような調査をするには、非常に都合がよいわけである。

この書は、高校の現状、高校生の学習、高校生の生活、高校と教育政策のあゆみ、高校教育の回復、というように五つの項目に分けてそれぞれ書かれており、その中でも、高校生の学習と生活ということが、半分以上書かれている。

また、いろんな問題点、アンケートの解答などが、普通科と職業科、さらに定時制とではどのような違いがあるかなども書かれている。また、それに対する著者の意見も書かれている。

それでは先に掲げた五つの項目を順次紹介していきたい。

まず最初は高校の現状から。

現在の高校は学校があるだけ「学校格差」というものによって序列化されているのが特色の一つである。それにこの序列化によって、上は一流校から下は限りなく何流校まで存在している。

このような序列化によって発生する問題も少なくはない。

ある高校に入学した生徒が「高校生の感じ、気持ちはどうか」という問のアンケートに対して、失望していると否定に答えたのは40パーセントに近く、「これからの生活をどう送るか」というのに対して、適当に送ると答えたのが三分の一であった。このように不満をもっている生徒が多い。この主な原因は、希望校に入れない、通学困難であるなどに集中している。

また、高校進学率が急上昇しつつあるのに先のように不満を持つ者があとを絶たない。それに、全体的に学習欲の喪失という現象も上昇線をたどっている。このようなことが高校の現状である。

次に高校生の学習・生活。

学習の一般的傾向をみてみると、先生方も言うてるように勉強をしなくなっている傾向がここ数年の間に強くなっている。特に予習を。

自宅学習などを調査したところ、都内の普通科で、平均2時間30分程度、工業では2時間未満が多い。また、テレビの視聴時間を調べたら、3時間以下が九割を上回っている。勉強ができない理由としては、集中力が足りないことが主な理由である。

また、学習法はよくわかるか、という問に対して、大部分の生徒がわかっていないと答えた。自分は、というと、私もその中の一人である、がそれは勉強をしないからであって、やれば自然にわかってくるはずである。と私は信じている。

このように、学校は勉強をするところである、と意識して通う人が減りつつある。

生活をみると、ホームルーム、クラブ、生徒会などの活動に積極的な参加は少なくなっている。それにこれらは、それぞれに深い関連性を持っている。

ホームルームは、生徒の学校生徒における自主諸活動の基本的な組織であり、またクラブとあわせて生徒会の基礎単位である、と書かれている。これは事実であると思う。ホームルーム活動が不活発であるから、生徒会、クラブ活動も不活発な状態にあるのだと思う。

以上、学習と生活は終わり。でも、この書には、これらをもっと詳しく具体的に書かれている。私はお互いにこの本を読んで、一度じっくり考えるべきだと思う。

学習と生活というものは深い結びつきがあると思う。

学校に入って失望感を抱いている者が多かったが、それは、自分が思いきってぶっつけられるものがないという人に多いと思う。

クラブにも参加せず、家に帰って勉強もしない、これでは学校へきてもただ失望感を抱くのは当然であろう。それにもまして、ホームルーム、生徒会などにも参加しなかったらそれこそ学校にくる意味なんか全くなくなってしまふ。そうなっては全然つまらない人生だろう。

そのようなことを個人がまず考えるべきだ。

最後に、まだ二つの項目が残っているけれど、それらを一つにまとめて、これから考えねばならないと思われることを自分なりに簡単に述べたい。

いまの高校生は、学生としての自覚が足りないと思う（私もその一人かも）。であるから非行、犯罪などをする者も増えてくるのだと思う。もう少し自覚させれば減るのではないだろうか。単にそれだけの問題ではないにしろ。

あと、学習意欲がない生徒が増えてきているけれど、それは生徒ばかりが悪いのではないと感じる。先生方にも責任があると思う。先生は、教科書を前に進もうとして、生徒と一緒に考えてくれない、とある生徒は言っていた。まさしくその通りだと思う。

先生も生徒といっしょに真剣に考えるべきだと思う。そうすれば生徒の方だってもっと真剣に学習に取り組むような気がする。

このようにさまざまな問題が発生している今日、これから先の高校教育を（くり返して言いますが）、生徒も、先生も、みんないっしょに考えるべきであると思う。それにはこの書が本当に役立つと思う。

岡田節人 著

「試験管のなかの生命」

— 細胞研究入門 —

3E 小宅 広 幸

この本はサブタイトルであきらかなように細胞研究の入門書である。京都大学の教授で、発生・細胞を専攻している著者が、最近の細胞についての研究の進歩を紹介し、同時に細胞研究の歴史をもおろませ、近代の生物学のあり方、特徴をのべている。解説書でありながら術語に解説を付けて、読みやすくしており、特別な予備知識なしでも十分に読みこなせる。

さて、私達は細胞という小さな生命のあつまりである。地球上の生命はすべて細胞から成り立っている。これはゆるぎのない事実である。この生命の単位である細胞は、原生動物やバクテリアのような単細胞生物を除いて、地球上の自然の条件において自律的生命はほばないといってよい。

しかし、この細胞を培養という管理された環境におけば、体の一部でも生命を維持する。培養の条件下では組織・細胞は個体にとって必然である死という生物学的現実をまぬがれることができ、かえって長い生命の維持が可能なのではないかと想像し、実際に実験・研究され、数々の成功をおさめてきた。寿命とか死とかいう問題に生物学がふれつつあるといえるのである。

こういった研究は得てして現実から離れがちである。研究者たちの夢追いであったり、単に研究上の興味から出発して、実際に私達の生活に利用されるのはずっと後のことである。この分野でも次々と実用化がどんどん進んできた。遺伝病の早期発見、ワクチンの製造などである。研究室の試験管の中ではガン細胞でさえ征服されたものもあるのである。

生命を対象とする分野においては、机上の理論というものが成り立ちにくい。膨大な量の努力と忍耐を投じて試行錯誤の中から生み出された研究結果は、彼らの不屈の精神と共にたたえられるべきであろう。

これらの研究は体の一部の組織を培養することにより進められた。しかし、試験管の中で育った細胞は体の中にあつたときと本当に同じ性質のものなのかという疑問が必然的にでてきた。というのは、この試験管の中の生命は分化（神経の細胞とか筋肉の細胞とかいうように働きの上での特徴をそなえること）しないということであった。この問題は少数の細胞に限って分化させることに成功したことから、ほば解決したと言ってもよいのだが、これによって新しい可能性がでてきた。細胞から個体を製造することである。それは、まずニンジンで成功した。重さ一ミリグラムから二ミ

リグラムの組織片から「クローン・ニンジン」というニックネームのりっぱなニンジンができたのだ。植物の細胞は動物のそれに比べ分化能力が発達している。クローン植物はできたが、はたしてクローン動物は可能だろうか。これは今のところ作れそうにないが、単一の網膜細胞の培養によってニワトリの眼の複製ができるまでに至った。

植物に限った場合、有用な品種、遺伝的に利用価値の高い品種を大量に作り出すよい手段となるであろう。また、培養液のホルモン組成をかえて好みの器官だけを自由にできる。根だけ作ることも葉だけ作ることもできるのである。このことが研究室だけのことでなく、実用化されるまでにはかなりの年月を必要とするだろう。

生物学はかくて、クローンと称する遺伝的にもとの生命体と等しいコピーを作り上げると、次に異種の細胞を融合させることをはじめた。センダイ・ウィルスとよばれるウィルスが、細胞同士を融合させてしまう働きがあることがわかり、これを使って、人間とマウスの細胞を融合させて一つの細胞にしてしまうのである。これこそ人工細胞であり、自然界にはありえないわけのものといってもよいのである。核移植という手段を用いて遺伝的に等しい生命を多量に作り出せるようになった。

これによって遺伝ということがだんだん明らかにされてきている。しかし、この科学の発展はクローン人間を作ることを可能にしてしまうのではないか。たとえそれが医療のためであったとしても、これは禁じられるべきである。が、この技術が可能となれば、だれか実行する者が出てしまうだろう。生物学がその学問をきわめようとされるとき、この大問題が大きく立ちはだかり、もはや研究者はその興味だけからの研究は許されない時代にはいろいろとしているのである。

この本には、興味をそそられる事実が数多く取扱われている。それだけに生物学の問題点が薄れがちである。それを読みとるには最後まで読み通さなければならない。このことなしには本書の目的は達成できない。また、難を言えば、各章のつながりが悪いところがあった。高専生には生物の授業がないので、一読をすすめた本である。



森永種夫 著

「犯科帳」

3 E 高槻健英

現在でもなお、犯罪が新聞紙上ににぎわし、その数は絶えることを知らない。犯科帳とは、そんな犯罪について取り扱った、長崎奉行所判決記録である。犯科帳が残っているのは、たいへんめずらしく、数多い奉行所の中で、長崎奉行所だけがどういふわけか残っていた。犯科帳は全部で、145冊あり、形式内容ともにいささかの異同がある。また、残念ながら、湿気と虫害に冒され、汚損の甚しい箇所、あるいは脱落したところもある。犯罪の内容から判決に至るまで、いろいろと読んでみると、やはり今日との相違点がかなり目に付いた。具体的に言うなら、まず死罪が多くその殺し方も多種多様であること、また、一般に事件の規模が小さいこと、などである。

とにかくそれでは、犯科帳の中からいくつかの事件について見てみよう。まず、犯科帳に現われた犯罪のうち、最も多い密貿易の中から。

『享保十五年、吉右衛門は唐人から票を手に入れ、八助に票と銀子三十三匁を渡し、唐品を受け取ってくるようにと命じ、唐船に向かって泳がせ、自分は岸辺から見守っていた。しかし、八助は戻らなかった。あてがはずれてもどってきた吉右衛門の家には、すでに捕り手が待っていた。判決一牢屋において死罪』内容はざっとこんなものであった。この男は、すでに唐船からの抜荷について、前科二犯を重ねていた（抜荷とは、密貿易のことである）。初犯は、自訴しているため処罪はまぬがれたものの、二犯は鼻そぎの刑に処せられている。今回は、その上での犯罪である。こうなると、金に目がくらみ、命も体裁もなくなるのだろう。信じがたいのは、鼻そぎの刑である。この他に耳そぎの刑、小指切りの刑もあったという。この上、不倫の男女関係がばれた事件において、男が陰茎切り、女が鼻そぎの刑になった例もあったというからただごとじゃない。現在の刑法についてはよくしらないが、今はそういった肉体的苦痛を与えるような刑罰はないように思われる。罰金・入牢・死刑についても、電気いす、あるいは首つりと比較的苦痛の少ない方法がとられるようであり、この辺に、当時の日本の文化水準がうかがえる。

次に、かたりの中から、かたりとは人をだまして金品を巻き上げることである。

『佐助は、兄が神主をしているところから、いつか見よう見まねで一応祈祷卜筮の法を習い覚えた。そしてそれを暮らしの種としていた。そこへ、船頭の松右

衛門が訪ねて来て、「金子を入れた紙入れを紛失したから、探索の祈祷をしてくれ」と頼んだ。佐助は、「金三步もだすなら必ず犯人が出る祈祷をしてやる」といい、話は決まり、さて祈祷をし一人の男をあげはしたが、その男は完全に白だったので、でたらめとさわがれ、佐助は白状した。判決一軽追放』

かたりは、今でも詐欺と称して別に珍しいことではない。私は詐欺をそれほど悪質な犯罪とは思わない。なぜなら、人を身体的に傷つけるわけではないし、まあ見方を換えれば、世の中なんて詐欺だらけみたいなものだから。

また、この本では女の犯罪について、男と区別して述べている。女子に対する処分は男子の幼年ものと同様非常に軽い。しかし、親の命に背く娘・亭主や舅に反抗する女房など、不倫の女子に対する処分はかなり厳しかったようである。この制度をいけなしいとは思ふ反面、わかるような気がする。戦後、男女の人権は平等となり、さらに今日では、女性上位と言ったぐあいである。これは、自然の条理に反する現象であると思う。それと言うのは、女性を男性と同等に、その独自性というものは認めるものの、本来女性は、男性に依存し、従属するものではないかと思われるからである。話しかるが、今日、基本的人権として保証される自由の一つに言論の自由というものがあるが、その重要さを物語るような事件があった。それは、『抜け買いた多量の広東人參を払い下げてもらえないかと、奉行所に願書を出したところ、お上の仕事にかれこれ注文するのは言語道断であると、急度叱りの処分を渡された』という事件である。抜け買いた物は、焼却されることになっており、犯人はその人參を利用し、市民を助けたいという善意からした事だった。我々の世代は、言論の自由ということについて、別に何とも思わない。が、これは重要なことで、言ってみれば、空気のようなものだと思う。だからと言って、いちいちかみしめながら吸えというのではなく、一度よく理解しとく必要性を感じたのである。

最後に、この本を読んで考えさせられた事は、現代の文明文化の発展と人間性である。ここ百年間におけるわが国の文明文化の進歩は、実にすさまじいものである。また、これからも進歩が続くであろう。反面、我々の環境はどうだろう、住みやすくなっただろうか。『とんでもない』河川・海・大気の汚染、騒音、etc……と数々の公害に悩まされている状態だ。そしてまた人間関係はどうだろう。昔は向こう三軒両隣といわれるような親しい交際であったと聞くが、今は、隣のおばあさんが亡くなったのを誰も気づかないでいるというような記事をたびたび見る時代になってしまった。原因としては、隣人が多いいこともあるけれど、やはり文明文化の発達にも大いに関係していると思う。まわりが少し便利すぎるのではないだろうか。人間の喜び

とは、文明文化の発達だけにあるのではないはずである。もっと人間性というものを見つめたらどうか。故きを温ねて故きに習ってははどうだろうか。この本は、犯罪についての書ではあったが、そこに潜む人間関係のあたたかさを、私に感じさせた。

石川達三 著

「生きるための自由」

3C 佐藤光男

そもそも自由に関する私の考察は、貧弱であった。自由という言葉を知ると、何か、人間の解放された幸せ……というイメージが、私の頭いっぱいになり、それだけで、何ら懐疑もなく満足していた。しかし、こんな私は、達三に言わせれば、低次の者であり、真の理解を持たない知識人にすぎなかった。読み進めれば進むほど、私は自分の考えが、いかになまぬるいものであったかを反省させられ、自由という美しい言葉だけにふりまわされて、現実を見のがしつつあった自分に気がつかざるをえなかった。

達三の、この自由に関する考察は、誰も予想できないほど、徹底的に厳しく、その叙述を追うごとに、私は何か胸に差しさまってくるものを感じていた。それは、今までの達三の作品での教訓や、忠告とは違って強烈なものであり、深刻なものでさえあった。

達三は、庶民のひとりとして、いつでも現実をしっかりと見つめている。現代社会の秩序の乱れにいち早く気づき、数々の作品を通して、つぶさに風刺している。これが達三の文学であり、達三の特異的な力であろうと、私は考えている。本書は随想であるだけに、その力はより強く、より積極的になったのだろう。

哲学での自由論、世界人権宣言の自由についての章句に、意地の悪いと思わせるほど、批判しているのは現実に生きている我々にとって、理想上の空論は、役に立たず、それどころかかえって、これら空論の美辞麗句が、この社会の中で、不当に濫用され、社会秩序の乱れの原因となっていると、言いたいがための批判である。そしてそれは、自由の真の理解を持たず、自由についての美辞麗句を、聖句の如く、あるいは、それが自分の信念であるかの様にふるまい、内に潜める打算的な考えやエゴイズムを、カモフラージュし、かたくな意見を押し通す人々への、激しい怒りでもある……と私には思える。だからこそ、意地が悪いと思わせるような叙述が、ところどころに残ったのであろう。

ところで、この不当な、濫用する人々への批判は、腐

敗した官僚や、企業界の人々だけでなく、我々庶民にも向けられているように思われる。——ちょうど、警告しているかの様に——。「自由は、いかなる場合にも特権ではなく、いかなる場合にも、それは秩序であって、自分のために有利に作用するものではない」、「現代社会の中で自由を要求すれば、それに見合うだけの義務や、責任が要求される」……こういった叙述には、私自身に、直接考えさせられるものがある、——自由だとして求めるものは、実は自分のエゴではなかったか。要求する自由は、そのための義務や責任を、忘れてはいないかどうか——。こんなことを考えると、この社会の中で自由に生きていくことの厳しさ、難しさをあらためて知らされたような気がした。

『生きるための自由』……この一冊は、未来の私自身に、一足早く社会の中で生きていくための自由の厳しさ、そういった失いつつある自由の半面を知らせてくれた。しかしそれは、不安をかき立たせ、一時だったにせよ、深刻なものにさえなった。だが、自由に生きることは、それだけ大切なことであり、価値があることだと、最後に私は考えていた。

五木寛之 著

「夜のドン・キホーテ」

3C 中野目慎一

この本『夜のドン・キホーテ』は、スペインの作家セルバンテスの名作『ドン・キホーテ』の換骨奪胎であった。

しかし、換骨奪胎とはいうものの、私は、『夜のドン・キホーテ』が、『ドン・キホーテ』に、新しい時代（現代—20世紀）の照明を与え、深い哀愁感をもって表現されているところに、読後深い感動を覚えた。

この物語は、主人公である20世紀のドン・キホーテこと、東山正剛先生—当年として72歳—が、ふとしたことから、エロ・グロ・ナンセンスなる週刊誌の類を耽読したことから始まる。そして、彼は、このような悪本が、氾濫する世の廃退を、一身をもって改めんと、地元博多から腐れきっている東京へと立つ。だが、彼の行動、また、その心情と時代感覚のズレは、はなはだしく、表面的に見る限り抱腹絶倒である。

しかし、私は、彼のそういう言動が、たとえ、時代感覚からズレていようと、真剣に、命がけでぶつかっていくというところに、一抹の同情心を起こさないでは、いられなかった。

上京した東山先生は、次々と退廃しきっている現象、つまり、トルコ嬢たち、フーテンバンドの紅こうもり

の青年たち、ナナハンを傍若無人に乗りまわす白骨団の若者たち、機動隊に激突していく学生デモ隊のメンバー、……等、に立ち向かっていく。ところが、時代遅れで、軍国主義の亡者のような東山老人は、時ならず、誰もが予期せぬ奇妙な行動をとり、彼らを動転させてしまう。しかし、このように、東山先生が時ならぬ奇行を演じることにより失笑を買われ、ついには周囲の人々から好感を持たれてしまう。そして、親しくなってしまうのである。

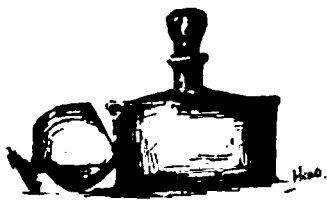
私は、こういう、真面目ではあるが、どことなくピントがずれた行動をする老人が、読んでいくうちに、私の心の中にも、知らず知らずのうちに、愛すべき人物として映じてしまったように感じられた。

終章において、東京での放浪を終え、ジェット機で帰る東山老人こと、20世紀のドン・キホーテは、その機内で次のように述懐していた。

「しょせん人間の世界は、それぞれに異なっているのだ。それを無理につなげようとするところから不安や、絶望が生ずるのかも知れない。そして、白骨団のリーダーも、紅こうもりの青年たちや、トルコ嬢も、すべての人間たち全部をひっくるめて生きている人間という生物の不思議を。その中においてみると、いま身近にいる人々よりも、不思議なことに、あのどうしようもない若者たちが、妙に親しく感じられてくる。」と。

この文章の中に私は、本来は、対立しているはずの東山老人の属する世界と現代の若者たちの世界が、なぜか、対立したまま、しだいに両者が相手を認め合いわかり合ってきたように感じとられる。

最後に、この物語は、よく考えてみると、世代の断絶の非難を示しているように思われる。なぜなら、東山老人と、ここに出てきた若者たちとの「ふれあい」を通して、それぞれの立場は違っても、また、理解し合えなくとも、共存の可能性はある、ということ、最後の東山老人の言葉の中に読み取れるからである。



「葉」、 「道化の華」

— 太宰治「晩年」より —

3 土 吾 妻 富 弥

「撰ばれてあることの恍惚と不安と 二つ われにあり”。

このヴェルレーヌの詩句が文学者 太宰治の心情をまことにふさわしく表現しているという。

太宰治の文学は、柔かくまた巧みである。そして、繊細であり、かつ、物憂い。

このへんのところが、彼の読者の心をつかむ、大きな魅力であるのかもしれない。

『晩年』は死について、深く鋭く追求した作品が数多い。

僕は、太宰治と三島由起夫を交互に愛読しているが、両者とも受ける感じが全く違うのである。

『道化の華』『思い出』など素敵な作品ばかりであるが、僕は『葉』が最も太宰文学を象徴するのにふさわしい作品であると思う。

とにかく、一つ一つの言葉が、魅力的で、感動させてくれるのである。

「安楽なくらしをしているときは、絶望の詩を作り、ひしがれたくらしをしているときは、生のよろこびを書き続ける。”

など、そのまま人生教訓にさえなりそうな文章が、絶え間なく続くのである。

また彼は、時々“死”をテーマに書いている。それは、心中から生き残り、想像を絶するほど悩み苦しんだ著者であるからこそ、私達の心を打つのである。だから太宰の作品は、いつ何度繰り返して読んでも、その時その時に、違った鮮明な感動を与えてくれるのである。

では次に『道化の華』についての感想を記してみようと思う。

「道化の華」は、左翼の非合法運動に疲れた著者が、行きずりの、銀座の酒場の女性と、江の島の海で投身自殺をはかった事件を題材にした、著者の秘められた罪意識の告白である。

それが少しも、らしくないのである。

身辺の人間を登場させ、客観的に柔らかい、いわゆる文学らしい文学にしてしまうのである。看護婦、友人、いとこの会話、この会話によって、心中の罪意識の告白を文学にしているのである。

またこの作品は、他の作品に比べて、一風変っている。

主人公は、大庭葉蔵（つまり、作者自身）。

その他に「僕」という主人公を登場させて、作者の自

意識が物語を中断して、直接小説に登場し、客観・描写的なリアリズム手法を批判し、否定し、注釈する。

この二元的な方法により内面と外部のリアリティを同時追求し、いわく言いがたい真実を表現しようとした。

このような手法が心中事件を題材にした、告白であるべき小説を、らしくない、太宰の文学にしまったようである。

太宰の作品は他にも『斜陽』『人間失格』『惜別』なども読んだが、この『晩年』が一番深く心に残るものがあるようである。

カミユ 著

「異邦人」

3土吉田幸夫

『異邦人』という言葉を手紙で引いてみると、異國の人とか外国の人というふうになっていた。

まず、この本を読んで何を感じたかと言われれば、何も感じなかった。何も感じないという嘘に聞こえるかも知れないが、少なくとも、『異邦人』という題目から受けるような印象はまるで感じなかった。最後まで読んで一体、だれが異邦人だったのか問いたくなるような感じを受けた。主人公ムルソーは決して異邦人なんかじゃないと感じた。

彼は、ごく普通の人間で、ごく普通のありふれた生活をしていた。また、彼の性格といえば、正直で感じたままに行動し感じたままに表現する、飾ることを知らない性格であった。

そのために彼ムルソーは、母親の葬儀の席で涙を流さなかった。それというのも、母親は三年前から養老院に入っていたので、ムルソーには母親の居ない生活が習慣となっていた。いくら母親といえども数年、別居して居れば、親子の愛など薄れてしまうのではないだろうか。そのため正直な彼は異邦人として扱われた。

普通一般の習慣に従って生活しなければ、彼は普通

の人間として扱われない。

その社会では、自分の性格と感情をむきだしにしてはいけなくて、その社会の芝居とも言うべき生活を続ける。一度、自分に正直になると異邦人として扱われる。

この本の荒筋は、主人公ムルソーが母親の葬儀後、友人レエモンの女出入りに関係してアラビア人を殺害してしまう。

彼は逮捕され裁判にかけられてしまうのだが、その時に彼の人間性に触れる。その法廷で。そのために彼の母親の葬儀の席での態度、その後の生活行動はその判決を左右した。結局、彼は斬首刑の判決を言い渡されるが、自分は幸福であったと確信し、今でもなお幸福であると確信するのであった。

この作品で、母親の葬儀で涙を流さない人間はすべて、この社会で死刑を宣告されるおそれがあるという筋は、彼が暮らす社会の中ではお芝居をしないと異邦人として扱われるよりほかないということである。それではなぜ、彼ムルソーは演技をしなかったかと言えば、彼は自分に正直で嘘をつくことを拒否したからだ。

さっと読んだだけだと彼は反社会的な否定的な人間に見えてくる。具体的に言えば、彼は死刑の判決を受けてからの牧師の面会を数回拒否した。しかしこれは、彼が自分の殺にとじこもったのではなく、ただ興味がなかっただけであった。主人公ムルソーは決して否定的な人間とはちがひ、彼は真理に対する情熱に燃える人間であった。

主人公ムルソーは決して異邦人と呼ぶべき人間ではなかった。ただ我々の生活を混乱させてしまったために、そんなふうに見えるだけで、実際は我々が異邦人なのではないだろうか。我々は毎日、無いことを言ったり、あること以上のことを言ったり、感じることを以上のことを言ったりする。人々は皆、生活を混乱させないためにそうした嘘をつく。これは実に恐ろしいことだと思う。そして異邦人の手によって真の人間は裁かれ死刑にされる。

作者アルベール・カミユはこの作品によって『異邦人』によって真の人間を見出し出しているのだと思う。主人公ムルソーは異邦人にして異邦人にあらず。



岩波新書と3年生(機械・電気科)

— 読んだ本の分布から —

池田 豊(国語科)

No	分類	冊	書名	No	分類	冊	書名
1	法律	5	○ 憲法講話(宮沢) 2 ○ 法と自由(末川) ○ 誤った裁判(上田・後藤) ○ 現代日本法史(渡辺)	9	宗教	3	○ 死後の世界(渡辺) 2 ○ 親鸞(野間)
2	政治	3	○ ホワイトハウス(山田) 2 ○ ナチスの時代(マウ)	10	世界史	5	○ ナイルに沈む歴史(鈴木) ○ 魔女狩り(森島) ○ パリ・コミューン(桂) ○ アリストテレスとアメリカ・インディアン(ハンケ) ○ 奴隷とは(レスター)
3	経済	2	○ 現代の資本主義(宮崎) ○ 自動車の社会的費用(宇沢)	11	日本史	1	○ 犯科帳(森永)
4	社会	3	○ 人種の差別と偏見(新保) ○ 社会保障(坂寄) ○ 狭山裁判(野間)	12	芸術	3	○ 現代音楽を語る(小倉) ○ 日本の民謡(浅野) ○ ある映画監督(新藤)
5	哲学思想	6	○ 権威と権力(なだ) 2 ○ ニーチェの顔(氷上) ○ 時間(滝浦) ○ 日本の思想(丸山) ○ 人生論(実篤)	13	記録	8	○ 部落の女医(小林) 2 ○ 死よ驕るなかれ(ガンサー) ○ 自由への大いなる歩み(キング) ○ 死の壁の中から(中西) ○ 失われた大陸(アンドレ・ヴエ) ○ 極北の人たち(シムチェンコ) ○ エチオピア絵日記(松枝)
6	心理	12	○ 感情の世界(島崎) 2 ○ 愛と憎しみ(宮城) 2 ○ 人間の限界(霜山) 2 ○ 社会心理学入門(南) ○ 欲求の心理(相良) ○ 人間性の心理学(宮城) ○ 天才(宮城) ○ 性格はいかにつくられるか(詫摩) ○ 生きるとは何か(島崎)	14	随筆	11	○ アメリカ感情旅行(安岡) 4 ○ エスプリとユーモア(河盛) 2 ○ 知的生産の技術(梅棹) ○ 花落(松田) ○ わたしの山旅(楨) ○ 川釣り(井伏) ○ 世界の酒(坂口)
7	言語	4	○ 日本語(金田一) ○ 日本人のこゝろ(西尾) ○ 言語と社会(トラッドギル) ○ 日本の方言(柴田)	15	理学	2	○ 太陽系(堀) ○ 試験管のなかの生命(岡田)
8	教育	4	○ 高校生(田代) 3 ○ ある小学校長の回想(金沢)	16	医学	3	○ 人間であること(時実) ○ 記憶のメカニズム(高木) ○ 眠りと夢(懸田)

注: () 内は著者名。数字は回数。

1. いきさつ

冬休みを迎えるに当たり、「現代人の現代的教養」を誂い文句にするこの新書の中から、自由に一冊を選んで読書紹介文をまとめさせた。

20日間という暇には手ごろの程度と量であること、範囲を限って選ばせることによって、傾向をとらえ易いと思ったこと、さらに、読みっぱなしにしない本読みの仕方——読書紹介文の書き方も身につけさせようとしたこと、この三つがねらいである。

あらかじめ「岩波新書解説目録」を教室に備えて内容のめやすをつけさせ、また、書名の予備登録によって

目標を定めさせた。

その本に定めた動機には、前からその方面に関心があったのでもっとはつきり知りたい、という積極型と、とも角、ノルマさえ果たせば、という気楽消極型とがあったことであろう。

社会・文化の上に功罪相半ばする世評のある「岩波文化」のわく内ではあるが、別表を見ていると、この年ごろ、この学年の人々の実態、好みがおのずから察せられるように思う。

2. よみとり

その本に一応きめて、いざ読み進んでゆくうちに、「しまった」と思ったものもあろうが、結果論を述べるならば、

(1) 記録・随筆類が多いのは、この内容が読物的でわり合い気軽に読めそうなのと、多方面にわたっているのだからくるものであろう。

(2) 社会科学諸分野への関心が強いことも察せられるが、倫理哲学や法学、経済学の授業を補充して、この好ましい芽を導き、伸ばしてやりたい。

(3) 特に心理学的なものに大きな欲求があるようだ。「我の自覚史」の過程から見て当然とも言うべく、一方、正式の教育過程の上で手当てをなしていない本校の現状から、適当な対策が望まれそうである。

(4) 理学面が乏しいのは、この際は努めて専門科目と離れたものを読んでみなさい、と助言したせいであろう。

3. つけたし

今の二年生の夏休み読書調査では、本らしい本を全く読まずに過ごした者が18%に達している。

放任すれば、貴重な青春学生時代の日々を、必要最低限の予復習の他は、マンガと電気紙芝居と音楽的騒音と、そして、ひまつぶし遊び(レジャー)とで埋め尽くしかねない人々には、まともな書物に、苦勞してかじりつく習慣を、在学中にぜひ養ってもらいたい、と切望する次第である。

新着図書目録

※印は図書館他は各教官の研究室に所在するものを分類別受入順に記載

総記

福島民報年鑑 昭和52年度版 福島民報社
朝日新聞縮刷版 51年7月~10月

朝日新聞社
国勢調査報告 昭和50年 いわき市役所

いわき市史	2 近世	いわき市※
	8 原始・古代・中世資料	同 ※
廣文庫	第7冊 く〜こ	名著普及会※
	第8冊 こ〜さ	同 ※
	第9冊 さ〜し	同 ※
	第10冊 し〜せ	同 ※
	第11冊 せ〜た	同 ※
	第12冊 た〜ち	同 ※
草野日出雄	写真で語るいわきの風土と文学	はましん※
	同 いわきの文化財	同 ※
	同 いわきのズリ山	同 ※
	同 いわきの洞と野仏	同 ※

日本図書館学講座	7 専門図書館	雄山閣※
東洋文庫	295 江戸繁昌記 3	平凡社※
	296 本期食鑑 1	同 ※
	297 子育ての書 3	同 ※
本居宣長全集	別巻 1	筑摩書房
漢文大系	18 文章軌範 古詩賞析	富山房
	19 戦国策正解	同
中国古典新書	44 大同書	明德出版
	現代の視点 1975 No. 73	毎日新聞社

哲学

三枝充憲 他編	東洋文化と日本	ベリカン社
山折哲雄	日本人の靈魂観 鎮魂と繁紋の精神	河出書房新社
今井淳	近世日本庶民社会の倫理思想	理想社
相良亨	近世日本における儒教運動の系譜	同
湯浅泰雄	神々の誕生・日本神話の思想的探究	以文社

西郷信綱	地獄と人間	朝日新聞社
金岡秀友	日本の神秘思想	玉川大学出版部
田中美輝夫	聖書英語論考	英宝社
緒橋敏次 他	対談 東洋の心	大修館書店※
朱子学大系	3 朱子の先聖 下	明德出版社※
近代日本思想大系	7 岡倉天心集	筑摩書房※
	18 石川三四郎集	同 ※
日本思想史講座	3 中世の思想 2	雄山閣※
	4 近世の思想 1	同 ※
日本思想大系	60 近世色道論	岩波書店
	64 洋学 上	同
大林太良編	世界の神話 (NHKブックス 259)	日本放送出版協会※
角川選書	74 仏教と民俗・仏教民俗学入門	角川書店
東洋人の行動と思想	14 荀子	群論社※
	27 日本人の家と宗教	同 ※
中村元 他編	アジア仏教史 中国編 II 民衆の仏教	

校成出版社 ※ 明治図書
 填書店 本居宣長の世界 填書房 ※

歴史

ふくしま一世紀 福島民友新聞社
 日本の歴史
 28 ブルジョワジーの群像 小学館 ※
 30 十五年戦争 同 ※
 31 戦後変革 同 ※
 32 現代の日本 同 ※

江戸時代図誌
 5 江戸 二 (2冊) 筑摩書房
 11 中山道 二 同
 25 長崎・横浜 (2冊) 同
 2 京都 二 同

中野片平会編
 原峰先生のこと 成美堂
 家永泰光
 櫻の革命と貴族 (リージョナルブックス) 古今書院 ※

島之夫 ソビエトの民衆と社会 (同) 同 ※
 鹿島宗二郎
 中国人のこころ (同) 同 ※

岩波講座 日本歴史
 4 古代 4 岩波書店
 12 近世 4 同
 8 中世 4 同
 25 別巻 2 同

続日本紀索引
 六国史索引 2 吉川弘文館
 日本三代實録索引
 六国史索引 4 同

飯塚浩二著作集
 日本の精神的風土 日本の軍隊 平凡社
 門脇恒二
 出雲の古代史 (NHKブックス 268) 日本放送出版協会 ※

真壁仁 他編
 民衆史としての東北 (同 270) 同 ※
 邦光史郎
 京都洛北かくれ里 (駈々堂ユニコンカラー双書 027) 駈々堂 ※

日本歴史文化史料集成
 8 寄席・見世物 三一書房 ※
 10 数寄 同 ※
 海音寺潮五郎
 17 日本史探訪 角川書店 ※

図説日本の歴史
 17 激動の昭和 集英社 ※
 樋口忠彦
 景観の構造 技報堂 ※

社会科学

文部省第102年報 昭和49年度 文部省
 福島県議会史編さん委員会編
 福島県議会史 昭和編第6巻 福島県議会
 経済企画庁編
 経済白書 昭和51年版 大蔵省印刷局 ※
 吉本二郎編
 改訂高等学校 学習指導要領の展開

谷 兼 牧夫フランチェスコの一日 (NHKブックス 261) 日本放送出版協会
 岩田慶治
 コスモスの思想 (同 262) 同 ※
 本間長世編
 新大陸の女性たち (世界の女性史 9) アメリカ 1 評論社 ※
 米川哲夫編
 未来を築く女性たち (同 12) 同 ※

自然科学

辻川郁二 他
 超伝導の化学 (共立化学ライブラリー 3) 共立出版 ※

林太郎 他
 酸堿の化学 (同 4) 同 ※
 玉虫伶太 他
 電極反応の基礎 (同 5) 同 ※

朝倉祝治 他
 電極反応の応用 (同 6) 同 ※
 内海誓一郎 他
 水—生命のふるさと (同 7) 同 ※

廣田蘭蔵 他
 反応速度 (同 8) 同 ※
 寺本英 他
 化学におけるランダムプロセス (同 9) 同 ※

牧島象二 他
 けい光現象 (同 10) 同 ※
 北野康 他
 炭酸ガスの化学 (同 11) 同 ※

野崎一 他
 立体選択的な有機合成反応 (同 12) 同 ※
 日本化学会編
 基本操作 1 (新実験化学講座 1) 九善 ※
 同 2 (同 1) 同

基礎技術 6 核・放射線 1 (同 7) 同 ※
 同 2 (同 7) 同 ※
 有機化合物 (同 11) 同 ※
 基礎技術 2 磁気 (同 3) 同 ※
 同 3 光 1 (同 4) 同 ※
 同 3 光 2 (同 4) 同 ※

宇宙地球化学 (同 10) 同 ※
 有機金属化学 (同 11) 同 ※
 酸化と還元 (I) 1 (同 12) 同 ※
 同 (I) 2 (同 15) 同 ※

山折雅信
 わかる流体力学 (2冊) 日新出版 ※
 エネルギー交換および新しい燃料の化学 化学総説 No. 12 1978 東京大学出版会 ※

畑一夫 他編
 化学実験法 東京化学同人 ※
 P. Sykes
 有機反応経路の調べ方 同 ※

矢ヶ部巖
 数Ⅱ方式 ガロアの理論 現代数学社 ※
 一松信 他
 大学数学の第一歩 同 ※

現代数学入門講座
 1 ベクトルと行列 同 ※
 2 新しい解析幾何 同 ※
 3 現代における古典整数論 同 ※
 4 複素数とガウス平面 同 ※
 5 関数の代数的処理 同 ※

桐村信雄
 函数論の演習 (2冊) 森北出版 ※
 万有百科大事典
 人体大地図 小学館 ※

星繁植男
 中性子回折 (実験物理学講座 22) 共立出版 ※
 森田栄 新演習音と騒音防止 オーム社 ※
 サンドラーカロ
 官能基別 有機化合物合成法 廣川書店

龍谷治治編
 有機合成化学Ⅱ 合成編 1 南江堂
 同 N 同 2 同

プラントル
 流体力学 上・下 (3冊) コロナ社 ※
 中村明子 他
 FORTRAN数値計算とプログラミング 共立出版 ※

若山芳三郎 他
 だれにでもわかる数値計算の基礎とプログラミング 啓学出版
 東京天文台編
 理科年表 昭和52年 九善

竹畑益 他
 有機化合物構造式インデックス 同
 F. マハチュック
 地形学 技報堂 ※

松本誠 行列と幾何学 現代数学社 ※
 R. S. Monson
 有機化学の基礎 東京化学同人 ※

大塚功三
 量子化学問題の解き方・基礎と応用 同 ※
 R. L. Pecsok
 分析化学 同 ※

鎌田仁 分析化学Ⅱ (標準応用化学講座 5) コロナ社 ※
 同 Ⅲ (同 6) 同 ※
 Robert .W. Parry 他
 バリー 新ケムス化学 実験に基づく科学 (付) 実験の手引き 九善 ※

大木道則編
 化学 物質のしくみと変化をさぐる 同 ※
 M. Randall 他
 熱力学 岩波書店 ※

小田良平
 未来化合物 (合成化学シリーズ) 九善 ※
 Addison Ault
 有機化合物の構造決定演習 東京化学同人 ※

後藤俊夫編
 現代の有機化学 カルベン・イリド・ナイトレンおよびベンザイン 廣川書店 ※
 北山殿 他
 全問精解 微積分演習 聖文社 ※

杉山昌平
 常微分方程式例題演習 (例題演習数学講座 1) 森北出版 ※
 富永晃 基礎演習 線形代数 聖文社 ※

福田安蔵 他
 詳解ベクトルと行列演習 共立出版 ※
 同 代数 幾何演習 同 ※
 同 微積分演習 1 同 ※
 同 2 同 ※
 同 応用解析演習 同 ※

菅原正博
 位相への入門 (基礎数学シリーズ 6) 朝倉書店 ※

矢野健太郎
 大学演習 微分方程式 筑摩書房 ※
 微分方程式 同 ※
 柳井晴夫 他

複雑さに挑む科学 講談社 ※

竹内外史 集合とはなにか 同 ※

若桑光雄 大学課程力学演習 培風館

山内恭彦 他編 大学演習力学 堂華房

妹尾学 化学熱力学 I (朝倉化学講座11) 朝倉書店

同 2 (同 12) 同

千原秀昭 他 化学英語の活用辞典 化学同人 ※

井本桂 有機反応序説 フリーラジカル 同 ※

Allen J. Bard 溶液内イオン平衡 — 理論と計算 同 ※

千原秀昭 他 化学平衡 (化学モノグラフ 27) 同 ※

下沢隆編 物質の探究 化学の現代化カリキュラム 丸善 ※

日本写真新聞社保健研究会編 人体と機能 I 保健大資料 No. 1 日本写真新聞社

同 II 同 No. 2 同

疾病と異常 I 同 No. 3 同

同 II 同 No. 4 同

外傷と急病 V 同 No. 5 同

環境汚染と健康 同 同

性病 I 同 No. 7 同

性病 II 同 No. 8 同

戸川隼人 FORTRANによる有限要素法入門 (サイエンスライブラリ情報) サイエンス社

兵藤申一 物理実験者のための13章 (物理学実験1) 東京大学出版会 ※

庄野克房 半導体技術 上 (同2) 同 ※

同 下 (同3) 同 ※

奥田教 実験物理の歴史 内田老鶴園新社

高分子学会編 高分子合成の新領域 地人書院 ※

鬼頭史城 渦 2冊 コロナ社 ※

松村寛嗣 他 解説熱力学の計算法 東京電機大学出版局 ※

高木茂男 数学遊園地 (ブルックス B-291) 講談社 ※

力武常次 巨大地震 (同 B-295) 同 ※

萩原幸男 地球動力を探る (同 B-300) 同 ※

高野義郎 物理学の再発見 (同 B-302) 同 ※

長谷川博一 他 暗黒星雲を探る (同 B-303) 同 ※

合田周平 予測の科学 (同 B-304) 同 ※

斉藤隆 常微分方程式 (応用数学物理学講座1) 朝倉書店

基礎化学編 高分子の本質 地人書院 ※

森 崇 思考期内科 (NHK ブックス 263) 日本放送出版協会 ※

高崎正義 地因入門 (同 266) 同 ※

堀越源一 真空技術 (物理学実験 4) 東京大学出版会

T. ページ 他 スカイ&テレスコープ天文選集 6 白揚社

Jacques Dixmier Algebres Emueloppantes Gauthier—Villars

Jean Dieudonne Cours de geometrie Algebricrie 1—2 Lemathematuien

William T. Reid Riccati Differential Equations Academicpress

根本光雄 Chemical Abstract の使い方 地人書院 ※

R. L. P. Lackete The Analysis of Categorical Data Griffin London

Y. H. Altovskiy Regression Estimation from Grissin Lomdom 同

J. A. H. Artigan Clustering Algorithms Wileyinterscience

S. Hreeram S. Abnyankar Algebraic Space Curves Montreal

H. ans Lausch Algebra of polynomials North Holland

Darid Mumford Curves and Their Jacobians Michigan

Wiktor Eckhaus Matched Asymptotic Expansions and Singular = Perturbations North—Aolland

Patrick Duval Elliptic Functions and Elliptic Curves Cambridge

Charles J. Pouchert I R. The Aldrich Library Infrared Spectra Aldrich Chemical Company ※

P. A. V. B. Swamy Statical Inference in Random Coefficient Regressi on Models Springer—Verlag

Brian Everitt Cluster Analysis Heinemann Educational Book

John Von Neumann Operators Ergodic Theory and Almost Periodic Functions ina Group Pergamon

George F. Carrier 他 Partial Differential Equations Academic

R. Reissig 他 Non—linear Differential Equations of Higher Order Noordhoff

David Mumford The Topology of Normal Singularities of an Algebraic Surface and a Criterion for Simplicity Mathematicues Publications

Oscar Zariski

Algebraic Surfaces Springer—Verlag

Nicholas Jardine Mathematical Taxonomy Wiley

工学・技術

扇沢勇 排水の生物学的処理 技報堂

黒沢俊一 水資源計画 (計画学講座 9) 朝倉書店 ※

昭和51年電気四学会連合大会講演論文集 電気学会

萩原尊禮 振動測定 宝文館

北村恒二 騒音と振動のシステム計画 コロナ社

日本音響材料協会編 騒音対策ハンドブック 技報堂

横山長之 他 環境アセスメント手法入門 オーム社

香坂要三郎 解説 工業化学 (改訂版) 誠書院 ※

谷下市松編 大学演習熱力学 堂華房 ※

岡田功 他編 化学工学ポケットブック オーム社 ※

佐藤一雄 物性定数推算法 丸善 ※

大竹伝雄 演習化学工業熱力学 同 ※

添田喬 他 わかる自動制御演習 日新出版

わかる自動制御 同

村中慶三 自家用電気設備の保護継電システム 電気書院

中川圭介 ミニコンインターフェース オーム社

早田保實 通信と制御のための電子部品総論 森北出版

L. コラップ 工学基礎微分方程式 サイエンス社 ※

近藤次郎 数学モデル 現象の数式化 丸善 ※

E. P. ポポフ 固体の力学入門 I 培風館

テイラー 他 鑄造工学 アグネ

上谷晃弘 コンピュータによるプロセス制御入門 日本工業出版

古賀豊城編 自動制御 朝倉書店

高井宏幸 他 自動制御の基礎と応用 実務出版

稲葉正太郎 自動制御入門 丸善

水野正夫 他 大学課程 工業力学 オーム社

電気書院編集部編 最新電験ハンドブック 電気書院

金安公造 他 新版交通公書 技術書院

近畿電車懇話会編

円筒歯車の製作 (歯車の設計製作 1)	大河出版	建設要覧	建設工業調査会	最適計画の理論と応用	同 著
同 設計 (同2)	同	国産新技術調査 Vol.2	新技術開発財団	山下直 他	同 著
稲田重男 他	朝倉書店	科学技術統計図鑑 Vol.2	同	デジタルプロセス制御	同 著
切削工学	朝倉書店	先端技術総説 Vol.2	同	シ、ルドン、ノビック	同 著
竹中利夫 他	朝倉書店	自動車内装部品の30年 明日をもとめて	河西工業	原発の恐怖 アメリカからの警告	アグネ著
油圧工学	養賢堂	わが国対外無線通信の黎明期	同	アーカー-R.タンプリン 他	同 著
H. ホフジズ	平凡社	国際電信電話	同	原子力公害 人類の未来をおびやかすもの	同 著
技術の誕生	平凡社	旭硝子工業技術奨励会研究報告 Vol.27 1975	同	中澤渡人	同 著
R.T. ウェンドランド	平凡社	旭硝子工業技術奨励会	同	鉄のメルヘン 金属学をきざいた人々	同 著
新しい世界を切開いた石油化学工業	東京化学同人	天然資源の開発利用に関する日米会議 耐風耐震 構造専門部会 第7回 合同部会会議録	同	原爆から原発まで 上、下	同 著
ルコルビュジェ	鹿島出版会	建設省土木研究会	同	テイラー	同 著
ユルバニスム	鹿島出版会	日本道路公団20年史	日本道路公団	鑄造工学	同 著
アーカーコーン	同	中央大学九十周年記念論文集	理工学部中央大学	G. アリトシュレル	同 著
都市形成の歴史	同	釜石製鐵所九十年史 この十年の歩み	新日本製鐵 KK	G. ストラング	同 著
茂田孝 環境開発論	同	秋山守男	同	有限要素法の理論	培風館著
B. ルドルスキー	同	回路網統一理論	森北出版	ギャラガー	同 著
人間のための街路	同	C.R. ワイラー	同	有限要素解析の基礎	丸善著
因宏哲男 他	同	工業数学 上・下	ブレイン図書	山岸正隆	同 著
コンクリート橋上り構造施工法	山海堂	R. ツルミョール	同	NC工作機械	日刊工業著
岩崎壽明	同	マトリクスの理論と応用	同	石田晴久 他	同 著
コンクリートの特性 (コンクリートセミナー 1)	共立出版	P.J.E. フェーサイス	同	超大型コンピュータ・システム	産業図書著
木村恒行	同	金属疲労の基礎	養賢堂著	岸南編 NCソフトウェア	工業調査会著
公害の理論	朝倉書店	日本機械学会	同	西山善次編	同 著
中塩貞吉 他	同	金属材料 巻9 強さの設計資料 1-3	日本機械学会著	金属の電子顕微鏡写真と解説	丸善著
Olaf A. Hougen 他	同	白鳥英亮	同	五十嵐日出夫	同 著
化学反応工学 1-2	丸善著	材料の力学 機械工学基礎シリーズ 1	朝倉書店著	土木計画数理 (2冊)	朝倉書店著
坂井渡 他編	同	Greenwood 編	同	松本島司	同 著
応用統計熱力学 (近代工業化学 7)	朝倉書店	機械設計 データブック	日刊工業著	土木解析法 1 (2冊)	技報堂著
清山哲郎 他編	同	竹山太郎 他編	同	同 2 (2冊)	同 著
反応解析 (同9)	同	狩野武 粉粒体輸送装置	日刊工業著	日本リモートセンシング研究会編	同 著
E.P. ポポフ	同	植松時雄	同	リモート・センシング・ノート 原理と応用	同 著
固体の力学入門 1-2	培風館著	水力学 (第2版 2冊)	産業図書著	中村良夫	同 著
大橋義夫	同 著	小玉正雄 他	同	土木空間の造形	同 著
材料力学	同 著	S.P. Timoshenko	同	石膏石灰学会編	同 著
福永太郎 他	同 著	材料力学本論 (2冊)	コロナ社著	石膏石灰ハンドブック	同 著
JIS使い方シリーズ 機械製図マニュアル 2冊	日本規格協会著	實津萬里	同	石本幹郎 他	同 著
ナジ. カルノー	同	水流工学	実書出版社著	テクノロジーアセスメントの進め方	同 著
熱機関の研究	みすず書房著	井原敏男	同	内田一郎	同 著
小茂島和生 他	同	H. リュッシュ	同	新版道路工学 (改訂版)	森北出版
内燃機関工学	実教出版著	コンクリート構造物のクリープと乾燥収縮	鹿島出版	星谷勝 力学構造物への応用	鹿島出版会
内燃機関編集委員会編	同	三野定 他編	同	確率論手法による構造解析	同 著
内燃機関の燃焼	山海堂著	土木工事の施工途中の安定計算と実例 (2冊)	近代図書著	ロイ. マン	同 著
平足収 自動車用機関計画原論	同 著	福田基一 他	同	都市の中の川	同 著
佐藤盛 ガスタービンサイクル論	同	河野俊助	同	ルコルビュジェ	同 著
松岡増二	同	新油圧技術談本	日刊工業著	輝く都市 (SD 選書 33)	同 著
ジェット、エンジン (構造編)	同	松本幸男	同	E. ハワード	同 著
航空工学講座 11	日本航空整備協会著	油圧機器の保守管理 (改訂版)	同 著	明日の田舎都市 (同 28)	同 著
京直夫 同 (運用編) 同 12	同 著	実例からみた油圧機器の故障対策	同 著	谷下市松	同 著
W.D. ベンジンガー	同	辻 茂 例題演習 油圧工学	同 著	太陽エネルギーの利用	恒星社厚生閣著
ロータリ、エンジン	工学図書著	金子敏夫	同 著	J.D. ファースト	同 著
八田祥三 他	同	油圧機器と応用回路 (改訂版)	同 著	エントロピー	同 著
蒸気原動機	森北出版著	油空圧用語編集委員会編	同 著	米谷栄二編	同 著
特機学会編	同	図解 油 空圧用語辞典	同 著	土木計画便覧	丸善著
新訂精密工作便覧	コロナ社著	辻 茂 空気圧工学	朝倉書店著	日本電子顕微鏡学会関東支部編	同 著
岩井実 他	同	ベル編 計算機と現代制御論	コロナ社著	走査電子顕微鏡 基礎と応用	共立出版
機械設計製図演習 5	オーム社著	ベルマン	同	武藤三郎	同 著
日本機械学会編	同			電子・電子回路理論	森北出版
機械図彙 歯車 上巻	日本機械学会著			巨理厚 他	同 著
日本規格協会編	同			機械力学 (共立全書 86)	共立出版
JISハンドブック 機械要案 1976	日本規格協会著			機械力学演習 (同 136)	同 著
天淵昭 昭和52年	海上保安庁			エンジニアリング、サイエンス講座	同 著
				6 工学数学 I	同 著
				7 確率統計工学	同 著

19 反動速度論 同 ※
 28 固体の強度 同 ※
 29 エネルギー変換の工学 同 ※

吉田文二
 船舶の科学 (ブルーバックス 294) 講談社 ※
 宇野英隆 他
 住まいの安全学 (同 299) 同 ※
 明石和彦 他
 動つりあい試験 (計量管理技術双書 25, 2冊) コナ社
 土木構造物標準設計 1.6.7.8.6-8巻 数値表 9.10.11.12.9-12 数値表 6-12 橋本, 橋脚解説 建設省 ※
 下水道施設設計指針と解説 2冊 日本水道協会
 第13回下水道研究発表会講演集 (昭和51年度) 日本下水道協会

谷口修 振動工学ハンドブック 技報堂
 標準機械工学講座
 5 改訂振動工学 (3冊) コナ社 ※
 破壊力学と材料強度講座
 2 き裂の弾性解析と応力拡大係数 培風館 ※
 14 多結晶体の強度と破壊 同 ※
 線形破壊力学入門 同 ※

化学工学協会編
 新版化学工学辞典 丸善 ※
 日本リモートセンシング研究会編
 リモートセンシング・ノート 原理と応用 同 ※

新版土木工学講座
 6 測量 1 コナ社
 7 2 同

図解土木講座
 アスファルト混合物の知識 技報堂
 関口久美
 機械振動学 (機械工学基礎シリーズ 2冊) 朝倉書店 ※

土木学会編
 土木計画学の領域と構成 (土木計画学シリーズ II 2冊) 技報堂 ※

前川純一
 建築音響 (大学講座 建築学 環境編 3) 共立出版 ※

佐藤俊雄
 油圧装置設計の実際 (機械工学全書 1053) 大和出版 ※

中村七郎
 化学工場における装置 機械取扱い法 東京化学同人 ※

P.M.ダン, フェース
 都市と交通コントロール (現代のテクノロジー) 河出書房 ※

大地羊三
 有限要素法とその応用 (数学ライブラリー 38) 電算機 21 森北出版

中部電気協会編
 改訂配電工学現場の手引 1 コナ社
 同 3 同

戸川隼人
 有限要素法による振動解析 (サイエンスライブラリ情報電算機 33) サイエンス社

山崎英蔵編
 MOS-LSI とその応用 (電子科学シリーズ 60) 産報

石田晴久
 マイクロコンピュータの使い方 (同 61) 同

大川善邦編
 同 作り方 (同 64) 同
 石田芳 同 開発技報 (同 65) 同
 正田英介 他
 マイクロプロセッサ制御の設計 (同 66) 同
 金子尚志
 PCM 通信の技術 (同 69) 同
 山崎孝次郎
 香辛料 II エスピー食品
 椎目博美 他編
 土木解析学 (現代土木工学 2-3冊) 丸善 ※
 赤木俊允 他
 プロジェクト・マネジメント (土木工学大系 17 2冊) 彰国社 ※
 明石一
 制御工学 (大学講座機械工学 12) 共立出版
 環境庁編
 環境白書 昭和51年版 大臣省印刷局 ※
 吉田謙一
 自動制御 (基礎機械工学全書 7) 森北出版
 西野宏
 ガスタービンおよびジェットエンジン (朝倉機械工学全書 9) 朝倉書店 ※
 井町勇編
 機械振動学 (同 10) 同 ※
 工業化学基礎講座
 11 化学工学実験法 同 ※
 理工学基礎講座
 15 固体力学 同 ※
 岩田一明 他
 切削工学 (精密工学講座 11) コナ社
 浅野友一
 熱工学 (基礎機械工学 5) 啓学出版 ※
 村上光清 他
 流体機械 (最新機械工学シリーズ 11) 森北出版 ※
 阿部芳朗編
 生産性設計 (設計工学シリーズ 4) 丸善 ※
 島居彦之
 切削工具 (わかり易い機械講座 14) 明現社 ※
 太田時男
 エネルギーシステム (NHK ブックス 269) 日本放送出版協会 ※

J. アルベツ 他
 写真測量ハンドブック 画像工学研究所
 吉田博也編
 環境アセスメント基礎手法 鹿島出版会
 林 泉
 電力系統 昭見堂
 アスファルト舗装要綱 昭和50年版 (2冊) 日本道路協会
 日本の土木と建築 資料建設省
 昭和51年度 測量士 同士補国家試験問題精範解説集 日本測量協会

有泉昌 他編
 わかりやすいセメントとコンクリートの知識 鹿島出版会

Yaonan Cnu
 計算機の構造とマイクロプログラミング 近代科学社
 第9回電気絶縁材料シンポジウム予稿集 電気学会

三宅泰雄 他
 新水質化学分析法 地人書館
 Lawrence E. Malven
 Engineering Mechanics Volume 1 Prentice-Hall
 同 2 同
 M 8800 Microprocessor Application Manual Motorola
 同 Programming Manual 同

Harris 他
 Shock and Vibration Handbook McGraw-Hill

Kurt Löffler
 Den Berechnung von rotierenden Scheiben und Schalen Springer

J.R. Rice
 Mechanics of Crack Growth A.S.T.M

A.J. Reynolds
 Thermofluid Dynamics Willey

産 業

国際電気通信関係略語集 第三版 2冊 国際電信電話
 国際電気通信 年表 資料 2冊 同
 日本放送協会編
 NHK 年鑑 昭和51年版 日本放送出版協会
 坪井八十二
 気候変動で農業はどうなるか (ブルーバックス 293) 講談社 ※
 四手井綱英
 森の生態学 (同 301) 同 ※
 野添憲治
 開拓農民の記録 (NHK ブックス 260) 日本放送出版協会 ※

渡部与四郎
 業務交通体系集 (2冊) 技報堂 ※
 国鉄下関工事局編
 山陽新幹線・小瀬川博多間工事誌 日本鉄道施設協会

芸 術

日本オリンピック委員会編
 モントリオールオリンピック 講談社 ※

司馬遼太郎 他
 古寺巡礼 京都 1. 東寺 淡交社
 足立巻一 他
 同 2. 相国寺 同

日本の仏画第一期第5巻
 国宝 仏西解図 金剛峯寺 学習研究社
 8巻 宝相閣曼荼羅図 フリア美術館 同
 7巻 国宝 高雄曼荼羅 神護寺 同
 8巻 国宝 不動明王二童子像 同

大和古寺大観
 6 室生寺 岩波書店
 新築日本絵巻物全集
 8 藤巻藤起 角川書店 ※
 13 菊式部日記絵巻 枕草子絵巻 同 ※

語 学

新英和大辞典 研究社

文 学

英和中辞典	旺文社
小西反七	
英語シノニムの語法	研究社
同 英語の前置詞	大修社
松本安弘 他	
あなたの英語辞断辞書	北星堂書店
山本忠弘 他	
英語論文の書き方	化学同人※
ブライアン・ポール	
インタビュー 英語	南雲堂
加藤常賢	
漢字の発掘 (角川選書 53)	角川書店※
高橋均 中国語解釈の基礎	大修館書店
八杉龍一 他	
論文レポートの書き方 (改訂版)	明治書院※
平井昌夫編	
文章上達法	至文堂※
日本文化会議編	
ことばと文化	研究社
渡辺千秋	
FENの書き方	ジャパンタイムス
山口百々男 他編	
項目別 通訳ガイド辞典	同
脇山裕 女性のアメリカ生活英会話	同
トミー植松	
電話英語の聞き方、話し方	同
山田勝美	
論街 (新訳漢文大系 68)	明治書院※
現代教養文庫	
425 新版・文章を書く技術	社会思想社※
渡辺茂 漢字と図形 (NHKブックス 264)	
	日本放送出版協会※
川崎洋 母の国父の国のことば (同 265)	同 ※
Intensive Course in English	
Elementary Part 1	E.L.S ※
同 2	同 ※
Intensive Course in English	
Intermediate	同 ※
同 Advanced 1-2	同 ※
English 900 book One-Six	同 ※
同 900 Programmed Workbook	
One-Six	同 ※
H.W.Fowler 他	
The Concise Oxford Dictionary	Oxford
Robert J. Dixon	
Regents English Workbook 2-3	
Regenes Publishing	
同 Tests and Drills in English	
Grammar book 1	Regents

児玉隆也		昌文社※
一読五厘たちの横丁		
保坂弘司		学燈社※
百人一首の美学		
岩城之徳		同 ※
啄木評伝		
井伏鱒二		講談社
Black Rain		同 ※
村上龍 限りなく透明に近いブルー		英宝社
村岡勇 英文学— 詩と自然		
荒川光男		松柏社
神秘思想と形而上詩人達		
グレイアム・ハフ		同
文学批評の視点		高文堂
佐藤勉 コンラッドの小説 人間存在の探究の軌跡		朝日出版社
小説の空間		
生地竹郎		文理
十四世紀の英文学		
A. ソルジュニーツイン		新潮社※
収容所群島 3-4		
トーマスマン全集		同 ※
II 夏の山		同 ※
V ヨゼフとその兄弟たち 1		同 ※
N 同 2		同 ※
X 評論 2		同 ※
M 同 3		同 ※
XI 書簡		同 ※
別巻 トーマスマン研究 トーマスマン年譜		同 ※
高萩精玄		白銀書房※
岩城実伝記		
小尾郊一 他編		山本書店
王量新詠索引 附王量新詠箋註		
池田亀麿		至文堂※
平安時代の文学と生活		
寺田實彦全集		岩波書店※
1-17		
大岡昇平		角川書店※
中原中也		筑摩書房※
辻邦生 北の岬		
山岸外史		同 ※
人間太宰治		
啄木全集		同 ※
1 歌集		同 ※
2 詩集		同 ※
3 小説		同 ※
4 評論・感想		同 ※
5 日記 1		同 ※
6 同 2		同 ※
7 書簡		同 ※
8 啄木研究		同 ※

中国の名詩鑑賞		明治書院※
2 古楽府		同 ※
10 清詩		
小川環樹編		大修館書店※
唐代の詩人 その伝記		
荒木源博		研究社
英文学が語る十二ヶ月		
中村真一郎		集英社※
詩人の墓		
岩波講座文学		
6 表現の方法 3. 日本文学にそくして		岩波書店※
上		
8 同 5. 新しい世界の文学		同 ※
10 同 7. 研究と批評 下		同 ※
11 現代世界の文学 1		同 ※
12 同 2		同 ※
世界の文学		
21 グラス		集英社※
26 ソレルス・ル・クレジオ		同 ※
31 ドノソ		同 ※
33 マラマツ・ペロー・ポールドウィン		同 ※
34 ロス		同 ※
山本健吉		
舞空 (角川選書 59)		角川書店※
前田愛 成島柳北 (朝日評伝選 11)		毎日新聞社
筑摩世界文学大系		
83 ローザ・ドノーソ		筑摩書店※
明治文学全集		
29 北村透谷集		同 ※
78 明治史論集 2		同 ※
土のふるさと文学全集		
3 現実の鏡視		家の光協会※
13 戦後のほじまり		同 ※
15 日本農民文学賞受賞作品集		同 ※
鑑賞日本古典文学		
3 万葉集		角川書店※
16 保元物語 平治物語		同 ※
21 太平記 曾我物語 義経記		同 ※
27 西鶴		同 ※
コーブリ全集		
3 中編小説		河出書房※
ルネッサンス研究所編		
「リア王」における「自然」(ルネッサン双書 2)		荒竹出版
吉川幸次郎全集 23		筑摩書房
鈴木修次		
鷹詩 (NHKブックス 267)		日本放送出版協会※
陳舜臣 敦煌の旅		平凡社※
白川静 中国の古代文学 (一)		中央公論社※
山本唯一		
易占と日本文学		清水弘文堂
F.R. Leavis		
Thought Words and Creativity		Chatto and Windus